

マスク着用保育と乳児の発達

～保育者がマスクを着用したままでも アタッチメント形成は可能か～

比治山大学短期大学部教授 七木田 方美

言葉を持たない赤ちゃんの、言葉にならない感覚を汲み取って、意味づけしながらお世話をするのが乳児の保育だ。

だが、COVID-19 禍はマスク着用保育で嗅覚が遮断された。そのため、調理室から漂うにおい気付けず、乳児の空腹や美味しさへの期待にタイミングよく共感できなかつたり、おむつ替えを即時的にできなかったりしたことに、戸惑いを感じた保育者が多くいた。

生理的に不快な状態にいる乳児をタイミングよく期待通りに快に導くのが保育だ。この繰り返しがあタッチメント（安心の土台）を形成する。この時期に培われるアタッチメントは豊かな人生を送るための土台になる。それを知っているからこそ、保育者は戸惑いを感じたのである。

さらに、学齡児においては世界的にチック症状、摂食障害が急増した。不登校と自殺も増えた。

“新しい生活様式”は、適切な感染予防対策の強化をもたらした一方で、精神的（サイコ）、社会的（ソーシャル）な不健康をもたらしたということだ。

そして23年2月、厚生労働省は科学的知見から、マスク着用はその有無により感染リスクの差異は無いに等しいとした。

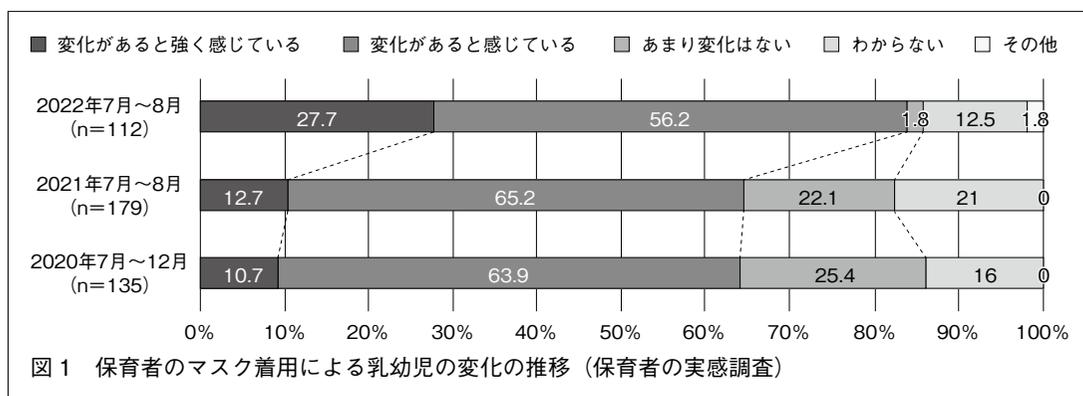
<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001055263.pdf>

本稿では乳幼児に焦点を当てて Well-being とマスク着用保育について説明する。

“サーブ&リターン”を理解しよう

COVID-19 禍、大人のマスク着用は、口元、表情そしてにおいを遮った。そしてこれらを通した“サーブ&リターン”（応答的で相互性のある関わり）を困難にした。サーブ&リターンとは、人生最初の1,000日に脳の発達に不可欠な乳児への関わりである。詳細は以下に記したユニセフのURL ①、筆者の用語説明 ②を参照されたい。サーブ&リターンが質的にいかに大切なかが解るはずだ。

①Building babies' brains through play : Mini Parenting Master Class | UNICEF Parenting



【語句整理】 COVID-19：新型コロナウイルス感染症，21年：2021年，におい：匂い・臭い・香り，乳児：0，1，2歳児クラスの子ども，幼児：3歳児クラスから就学までの子ども，マスク着用保育：保育者がマスク着用のまま保育をすること

② <https://hijiyama-u.repo.nii.ac.jp/records/2449>

“新しい生活様式”と乳幼児の変化

COVID-19 禍、乳児に変化があるかどうかを現役保育者に尋ねた結果を前頁図 1 に示した。3 年目の 22 年には、「変化がある」と実感した保育者は 84% にのぼった。就任時からマスク着用保育のため解らないという保育者を除くと、95% が変化を感じていたことになる。

乳児の具体的な変化は、「マスクを外して欲しそうにする」「反応が乏しくなった」「会話や表情によるやりとりが長続きしない」「絵本の読み聞かせ時の集中力が低下した」「表情が乏しくなった」などである。これらの変化はサブ&リターンのしにくさが原因と考えられる。詳細は筆者が実施した 21 年の調査研究を参照されたい。

<https://hijiyama-u.repo.nii.ac.jp/records/187>

COVID-19 禍の発達への影響

東日本大震災と同様に、小中学生の視力低下と左右差が顕著になったという報告がある (③)。制限された生活下では、発達途上の感覚機能の発達に悪影響を与えたことがわかる。

米ブラウン大学の研究者らは、COVID-19 禍とそれ以前に生まれた乳幼児の比較から、言語、運動能力、認知能力などの発達全般が低下したと報告した。さらに、京都大学と慶應義塾大学の研究者グループは、5 歳時点でコロナ禍を経験した群は発達の遅れが確認され、3 歳時点では明確な発達の遅れは見られないが、発達の個人差・施設差が拡大し、保護者の精神状態と発達の関連を示唆した (④)。

乳児期に受けた影響は、即時的に明らかになるものと、時間を経過してから明らかになるものがある。数値にできる視力、体重身長、知能検査などは容易に評価できる。筆者が述べるアタッチメント形成への影響は、現時点で客観的な評価は難しいが、ハーバード大学子ども発達支援センターが科学的な観点から論じたワーキングペーパーを参照すれば、アタッチメントの問題は、ボディプローのように後々に影響が現われることが解る (⑤)。

③ <https://www.mdpi.com/2227-9067/9/3/342>

④ <https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2023-07-11>

⑤ National Scientific Council on the Developing Child, 2004 : <https://developingchild.harvard.edu/resources/wp1/>

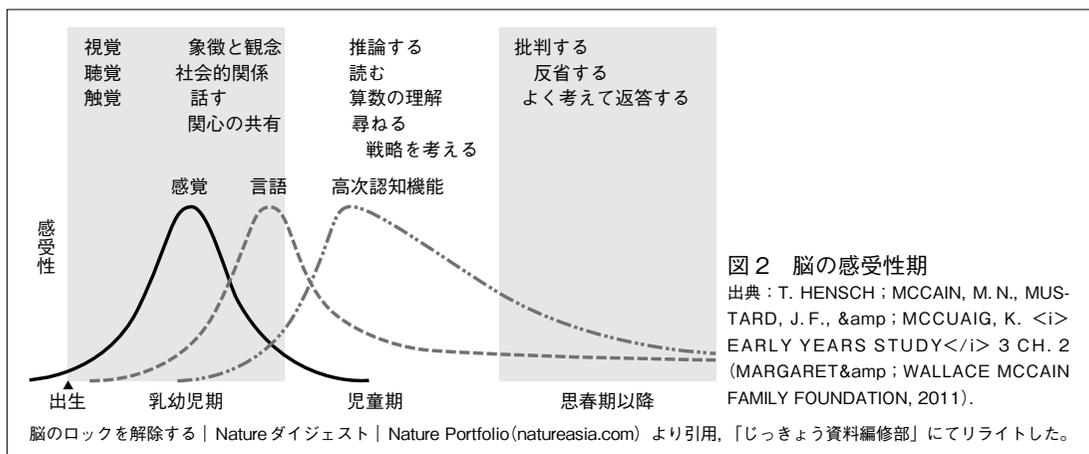
マスク着用保育とアタッチメント形成の限界

(1) 乳児期は感覚の感受性期

人生で脳が最も発達するのは乳児期だ。そして脳には最も影響を受けやすく、効率よく発達する時期がある。それを「感受性期」という。

乳幼児期は、見る、聞くなどの感覚の発達の感受性期にあたり、感覚の感受性期の次に言語の感受性期がやってくる。感覚を表現するとき、フワフワ、サラサラ、スーッとしたり、と、オノマトペや比喩で表現されることが多い。その理由は、感覚の感受性期が乳幼児期にあるため、乳幼児が発音しやすく、感覚にピッタリした言語が必要とされるからだ。すなわち、言語は感覚の発達があってこそ表出されるのである。

そして思考に必要な記憶や計算などの高次認知機能の感受性期は、言語を用いるため、児童期にピー



クがある。幸いなことに高次認知機能は、ピークを過ぎてても感受性期が閉じることなく磨き続けられる(図2)。

(2) マスクで遮られる感覚情報

「見ること」「聴くこと」は、乳児期に環境の影響を受けて育まれる。COVID-19 禍、日中の長い時間を保育施設で過ごした乳児は、マスク着用保育のため、保育者の口元や表情を見て育つことが困難となった。そのため保育者の声は聞こえるものの発生源がわからず、キョロキョロとする乳児の姿が見られたという。

さらにマスクは保育者の「嗅覚」も遮断したため、マスク着用保育は嗅覚情報からはじまる乳児と保育者の相互的で応答的なサーブ&リターンの欠如をもたらした。

<https://hijiyama-u.repo.nii.ac.jp/records/2424>

(3) 食事時のサーブ&リターン

乳児と保育者が共鳴・共感しやすく、無意識のサーブ&リターンが生じやすい場면을保育者に尋ねたところ、100%の保育者が「食事時」にサーブ&リターンが生じやすいと回答した。

乳児の咀嚼嚥下、消化機能は未熟なため、保育では一日に何度も食事をする。食事場面では、保育者は乳児と対面、または膝に抱いた状態で乳児の食べるタイミングに合わせて援助する。乳児は咀嚼嚥下の練習を始めたばかりで、誤嚥、窒息の危険が高い。そのため、保育者は乳児がうまく上唇で食事を口の中に取り込み、咀嚼し、飲み込めるよう、言葉で「カミカミ、ゴクン」と言うだけでなく、次頁写真1~3のように実際に乳児と共に口を開け、一緒に食べてはいないが共に味わうように食事を進める。

したがって、マスク着用保育では、乳児は咀嚼嚥下の練習が十分にできなかつただけでなく、美味しい、甘い、酸っぱい、苦いなどの表情による感情の共有も満足にできず、味わうという喜びのチャンスが減ったことになる。

(4) 絵本の読み聞かせ時のサーブ&リターン

さらに絵本の読み聞かせ時は、95%の保育者がマスク着用のままであった(図3)。また、共鳴動作は陽性感情時に生じやすいものだが、「乳児と笑い合うなどの陽性感情のやり取りが減少した」と感

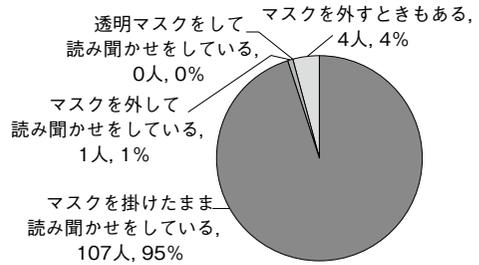


図3 読み聞かせ時の保育者のマスク

22年、乳児クラス112名の保育者を対象に調査した。95%の保育者がマスク着用のまま読み聞かせをしていた。代わりに身振り大きくする、絵本を動かすなどの工夫をしていた。

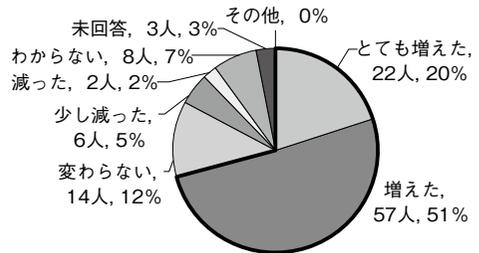


図4 密を避けたり手指消毒の注意喚起により乳児の行活動を中断すること

22年、乳児クラス112名の保育者を対象とした。71%が感染拡大防止策の三密を避けるために注意したり子どもの活動を中断することが増えたと回答した。注意中断は乳児の活動を否定することになる。自己肯定感や自尊心となり、くじけても頑張れたり、他者を大切にしたりする力の土台となるため、通常の保育では、注意中断は危険を伴う場面以外では行わない。

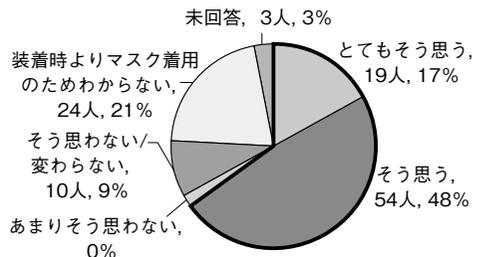


図5 乳児の排せつのおいに気づきにくくなった

22年、乳児クラス112名の保育者を対象とした。65%の保育者が、便のおいに気づきにくくなったと回答した。保育者がマスクをしていることにより、子どもがおむつに排泄をしたとき、タイミングよく取り換えられていないかもしれないということになる。アタッチメント形成に必要な関わりがマスクにより欠如してしまったと考えられる。

じた保育者が4割、「保育中に乳児に注意したり活動を中断したりする」が7割にのぼった(図4)。



写真1



写真2



写真3

このように、マスクは口元だけでなく、うれしい、楽しいという感情の共有も遮ってしまった可能性があることを認識したい。

(5) においから始まるサーブ&リターン

乳児のアタッチメント形成は、保育者等の養育者による日常のケアの繰り返しによって形成される。乳児期の情動は快—不快であり、特定の保育者がいつも同じ基準で関ることが必要となる (6)。

⑥ <https://nhhk.net/wp-content/uploads/2023/09/a4e58ce065dd8730f47b36b4bdfedfffb.pdf>

マスク着用保育により、排せつ援助のきっかけとなる便のにおいに気づきにくくなったと感じた保育者が65%にのぼった。同じ顔の人が同じ基準で不快を取り除き、快を与えるという繰り返して乳児に期待が生じる。乳児はその期待を叶えることによって、生きるために欠かせない人への基本的信頼感を獲得する。つまりCOVID-19禍は、乳児が人への基本的信頼感を獲得しづらい状況であったということだ。また給食室から漂うにおいを乳児は保育者と共有できず、においから始まる幸せなサーブ&リターンのチャンスを逃したということにもなる。

(6) 言葉の発達

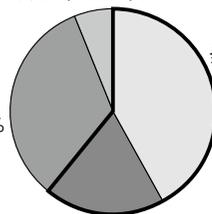
23年5月、COVID-19が5類感染症となり、保育者のマスク着用保育が緩和された。23年6~7月の調査では、511名の保育者のうち約7割の保育者が、言葉の発達に気になることがあると回答した(図6)。マスク着用保育による潜在的で感覚的レベルでしか捉えられなかった悪影響は、徐々に顕在化してきたようだ。

その子どもにとって今大切なことは何か

マスクによって、においや表情などを通じたさまざまな感覚を身近な大人とタイミングよく共有できずに育った乳児は、心身共に安心して一歩を踏み出

未回答, 30人, 6%

気になる
ことはない,
171人, 33%



発話が少なく、
ぎこちない、
212人, 42%

健診等で言葉の遅れ指摘あり、
98人, 19%

図6 言葉の発達で気になることはあるか

COVID-19が5類感染症に位置付けられ、保育者のマスク着用が個人に任せられるようになった23年6~7月に、中国地方の3自治体の保育者511名より回答を得た。約7割の保育者が言葉の発達に気になることがあるとし、さらに「健診等で言葉や発話に問題あり」は保育者が把握しているだけでも全体の2割に上った。

すために必要なアタッチメント(安心の土台)が十分に形成されず、人生の土台が脆弱になった恐れがあるということを、サーブ&リターンと感受性期を軸に述べた。

乳児期の影響の有無は思春期を終えた頃に幸福感(Well-being)を測ることで明言できるかもしれないが、幼児期、学齢期の経験は人によって多種多様で、その経験をどう感じるかもそれぞれだということを考えてほしい。

だからこそ、COVID-19禍、サーブ&リターンのチャンスが減り、アタッチメント形成が困難な状況下に乳児が置かれていたという事実を皆が忘れずに配慮し続けたい。それは決して同情するのではなく、子どもが「今を最も良く生きている」という実感を持てるように支えるということだ。必要なのは、子どもらが発達の伸び代を埋め尽くせるよう、「その子どもにとって今大切な事は何か」というブレない視点を持つことだ。具体的には、23年12月に内閣府が掲げた「バイオ・サイコ・ソーシャル」のWell-beingを構成する3つの視点である。
https://www.cfa.go.jp/policies/kodomo_sodachi/